小学校
光村ポケット 国語

ローマ字のつづり方が変わりました

令和７年12月、「ローマ字のつづり方」が内閣告示され、ローマ字のつづり方が改定されました。本誌では、改定のポイントとその背景を解説します。

また、改定されたローマ字のつづり方に対応した学習を行っていただけるよう、学習材や指導用資料も別途ご用意しております。適宜、ご活用ください。

LINE公式アカウント友だち募集中!
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。

光村図書

教授用資料　本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

ローマ字のつづり方、何が変わった？

「ローマ字のつづり方」
（令和7年12月22日内閣告示第4号）

❶ローマ字の表が一つに

ローマ字のつづり方には、これまで、一般に国語を書き表すものである第1表（いわゆる訓令式）と、事情がある場合に限り用いる第2表（いわゆるヘボン式と日本式）の2種類（資料1）があり、教科書では、これらのつづり方を併記してきました。しかし、実社会において、第2表の一部のつづり方が広く用いられてきたことや、従来の「ローマ字のつづり方」とは異なるさまざまな表記の慣用が見られることなどを踏まえて、一つの表（資料2）に統一されました。

資料1　従来の第1表ならびに第2表

第　1　表　　〔(　) は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第　2　表

sha	shi	shu		sho
		tsu		
cha	chi	chu		cho
		fu		
ja	ji	ju		jo
di	du	dya	dyu	dyo
kwa				
gwa				
				wo

資料2　今回改定された本表

ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o			
カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キャ kya	キュ kyu	キョ kyo
サ sa	シ shi	ス su	セ se	ソ so	シャ sha	シュ shu	ショ sho
タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te	ト to	チャ cha	チュ chu	チョ cho
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo
ハ ha	ヒ hi	フ fu	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo
ヤ ya		ユ yu		ヨ yo			
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya	リュ ryu	リョ ryo
ワ wa				（ヲ o）			
ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya	ギュ gyu	ギョ gyo
ザ za	ジ ji	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジャ ja	ジュ ju	ジョ jo
ダ da	（ヂ ji）	（ヅ zu）	デ de	ド do	（ヂャ ja）	（ヂュ ju）	（ヂョ jo）
バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo
パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo
				ン n			

※　〔 〕を付したつづりは、現代において、別の仮名に対応する音と同じ発音をするものとして扱われるため、このつづり方においては使い分けをしない。

本表に関わる三つのポイント

ローマ字の表の改定については、大きく分けて三つのポイントがあります。

(1)第2表の表記への統一

社会で実際に用いられている表記であり、多くの人たちが慣れ親しんでいるという状況から、いくつかの仮名が、従来の第2表で示されているつづり方に統一されました。具体的には、「し」「ち」「つ」「ふ」「じ」「しゃ」「しゅ」「しょ」「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」「じゃ」「じゅ」「じょ」の14音が第2表のつづり方に統一されています。

(2)発音が同じ仮名が同じつづり方に統一

一般的に同じ発音をする仮名が他にあるものについては、一つのつづり方に統一され、〔 〕を付して示されました。具体的には、「を」「ぢ」「づ」「ぢゃ」「ぢゅ」「ぢょ」の6音が、それぞれ同じ発音の仮名と同一のつづり方に統一されています。

また、必ずしも同じ発音として扱われるものではありませんが、従来の第2表では「kwa」「gwa」として示されていた歴史的仮名遣いの「くわ」と「ぐわ」も、現代仮名遣いでは「か」「が」と表記されることから、本表には示されていません。

(3)撥音を本表にも表記

従来の第1表ならびに第2表では、撥音の「n」は促音や長音と同様に扱い、表の中には示されていませんでしたが、仮名の「ん」に対応することから、本表で示されることになりました。

❷長音の表記が二通りに

仮名のつづり方の他に、長音の表し方も改定されました。これまで、長音を表す際には、「^」（サーカムフレックス）を使用していましたが、今回の改定から、以下の二通りで表すことが示されました。

(1)母音字の上に符号「¯」（マクロン）を付ける。
例　かあさん　→　kāsan
　　おおかみ　→　ōkami

(2)母音字を並べる。
例　かあさん　→　kaasan
　　おおかみ　→　ookami

基本的には、上記(1)の書き方を用いますが、次の場合は、(2)の書き方が一般的となります。

- イ列

例　にいさん　→　niisan
　　しいたけ　→　shiitake

- エ列のうち、「とけい」など、平仮名で「え」と書かないもの

例　へいせい　→　heisei
　　ていえん　→　teien

ローマ字入力は変わりません！

改定されたローマ字のつづり方は、アルファベットを用いて日本語を読み書きするためのものです。そのため、情報機器で日本語の漢字仮名混じり文を書くときに、便宜的に利用している「ローマ字入力」の方法に変更はありません。例えば、改定されたローマ字のつづり方で、「つ」は「tsu」と書きますが、キーボードで「つ」と打つ際には、これまでどおり「tu」と入力することも可能です。

また、「ぢ」のように、発音が同じ仮名が他にあり、表記を区別しなくなったものについては、従来のつづり方を参考にする必要があります。ご指導の際には、ご留意ください。

参考資料　ローマ字入力で用いることができるつづり方

し	shi	si	づ	zu	du	じゃ	ja	zya
ち	chi	ti	しゃ	sha	sya	じゅ	ju	zyu
つ	tsu	tu	しゅ	shu	syu	じょ	jo	zyo
ふ	fu	hu	しょ	sho	syo	ぢゃ	ja	dya
を	o	wo	ちゃ	cha	tya	ぢゅ	ju	dyu
じ	ji	zi	ちゅ	chu	tyu	ぢょ	jo	dyo
ぢ	ji	di	ちょ	cho	tyo	ん	n	nn

こちらもご確認ください

文化庁のウェブサイトでは、具体的なつづり方のポイントや、内閣告示がどのようなものか、何が変わったのかなどの疑問について分かりやすく解説した「『ローマ字のつづり方』に関するQ&A」や、「『ローマ字のつづり方』解説動画」も公開されています。必要に応じて、ご覧ください。

「『ローマ字のつづり方』に関するQ&A」

「『ローマ字のつづり方』解説動画」

ローマ字のつづり方は、なぜ変わったの？

ローマ字のつづり方の改定に至った背景や理由について、文化審議会国語分科会ローマ字小委員会の主査として改定に関わった、**森山卓郎先生**（早稲田大学）にお答えいただきました。

昭和29年内閣告示第1号「ローマ字のつづり方」から約70年経ちますが、学校で習っていた訓令式のローマ字（第1表）は、社会ではほとんど使われていませんでした。学校で学習するローマ字と社会で広く使われているローマ字との間に大きな違いが生まれていたのです。また、社会の国際化が進み、英語の表記の影響を受けたローマ字表記が広く使われるようになったことも問題でした。誰にとっても使いやすく、日本語の基本的な音韻に過不足なく対応するように整理する必要がありました。

そこで、国語を表記するうえで十分な機能を果たせるローマ字つづりとするために、ローマ字の使用の現状を踏まえ、つづり方の改定がなされました。

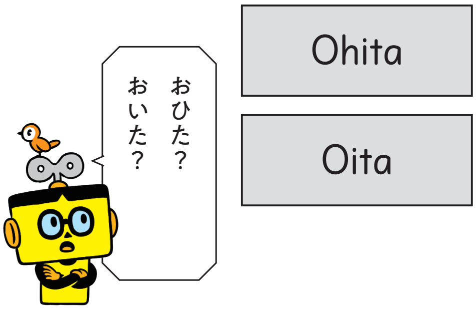
実際の日本語の音に近い表記に

訓令式のローマ字は、五十音図に対応した音の整理としては、優れた書き表し方でした。しかし、このつづり方の中には、日本語を知らない人が実際の日本語の音と異なった発音をしてしまう表記がありました。例えば、訓令式ではタ行イ列の音を“ti”と書きますが、そのまま読めば、「ティ」と読めてしまいます。今回の改定では、実際の日本語の「チ」に近づくよう、“chi”というつづり方に統一しました。サ行、タ行、ハ行などで、そのような対応をしています。

長音を正確に表す表記に

今日では、長音符号を使わないローマ字表記が広がり、伸ばす音であるかどうかの区別ができない表記を目にします。

例えば、「交番」を“koban”と表記していることがありますが、これでは「こばん」と読めてしまいます。令和5年度「国語に関する世論調査」（文化庁）では、どのローマ字表記が読み書きしやすいかという問いに対して、“koban”と回答した人は7.8％、“kôban”は9％、“kouban”は37％、“kōban”は40.8％となっています。この結果から、“koban”という表記は、多くの人に読み書きしやすいとは思われていないことが分かります。また、符号「^」（サーカムフレックス）を使った表記が、符号「¯」（マクロン）を使った表記と比べて、定着していないことも分かります。


おひた？
おいた？
Ohita
Oita

それから、“h”によるオ列長音表記も見られますが、それだと、例えば「大分」を“Ohita”と表記した場合、「おひた」と読めてしまいます。

そこで、長音の表記は、基本的には母音字に符号「¯」を付けて表すか、現代仮名遣いに合わせて母音字を並べて書くこととしました。

今回の改定の背後にある考え方について、身近な言葉を基に、教室でも考えてみるとよいでしょう。また、基本的なつづり方が身についた段階で、“bon’odori”などのアポストロフィの利用やハイフンによる区切りが必要な理由も考えてみるとよいと思います。

教授用資料
発行日 2026年8月10日
発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111（代表）
イラスト 杉﨑貴史

光村図書

光村図書ウェブサイト
光村図書